農作業 テクニカルダイアリー

Agricultural-work technical diary

夏ネギ

大網経済センター
営農指導員　内山 晃宏

令和元年産の振り返り

本年産は、作付面積が増加したことや太物の出荷が多かったことから、出荷量が前年度を上回りました。一方で、収穫前に高温、乾燥、濃霧の日が続いたことから、べと病やアザミウマの食害などが多発し、葉の確保が課題となりました。次年度以降は被覆除去後、定期的な防除を心掛けてください。

今回は、作型別の栽培および施肥のポイントをお伝えします。

施肥について

施肥量は表❶を参考にしてください。

夏ネギは秋冬ネギに比べ栽培期間が短いため、基肥主体の施肥を心掛けてください。トンネル被覆の作型の場合は、被覆期間を考慮し緩効性（ロングタイプ）の肥料を使用します。SCネギ専用047は肥効が140日と長く、被覆期間中の肥料切れによる生育遅延・抽苔の回避が期待できます。

基肥の施肥量は窒素成分で15～20キロを目安とし、早期収穫の作型ほど施用量を多くしてください。追肥は速効性の肥料（高度化成S842など）を使用し、窒素成分で10キロを3～4回に分けて施用します。

収穫期別作型のポイント

●5月どり（大型2条トンネル栽培）

近年は4月末から出荷があり、早期収穫に取り組む生産者が年々増えています。低温伸長性のある品種（春扇など）を、10月上旬に播種し11月下旬には定植します。被覆には9～10尺の大型トンネルを使用し、日中の温度を確保することで、抽苔回避と生育の促進を図ります。一方で、高温過ぎると生育遅延となることから、トンネル設置後すぐに上部換気（5メートルおきに1穴程度）を行いましょう。

●6月どり（小型1条トンネル栽培）

6月以降に収穫する場合は、小型の1条トンネル栽培が主力です。大型トンネルと比較して資材コストも軽減できることから、新たに栽培を始める方でも取り組みやすい作型です。定植後、極端な寒さにあたると欠株が発生することがあるため、乾燥している場合を除き、できるだけ早く被覆するようにしましょう。品種は晩抽性で、初夏でも襟締まりの良い、初夏扇や龍まさりが普及しています。

●7月どり（露地栽培）

高温下で太りの良い品種を、抽苔の発生の少ない時期に播種し、7月に収穫する作型です。播種時期が早ければ早いほど、抽苔する危険性が高まります。特に早生品種は、早播きは絶対に避けてください（播種は11月中旬以降とする）。太りが良く、生育速度の速い、夏扇パワーや夏扇4号が適しています。

表❶　施肥量の例

基肥（緩行性被覆肥料使用例）　10a当たり

肥料名	成　分	施肥量
粒状セルカ	アルカリ分47%	140kg
マルチサポート2号	総合微量要素	60kg
苦土重焼燐	0−35−0	40kg
SCネギ専用047	10−14−7	100～200kg
または さんぶジシアン有機特806	8−10−6	120～240kg

追肥　10a当たり

肥料名	成　分	施肥量
高度化成S842	18−4−12	60～80kg

最新情報をお届けします
「営農情報メール」配信中！　登録無料!!
作柄情報　病害虫対策　青果物概況　イベント案内　など
◆ご登録は、右記のQRコードまたはJA山武郡市のホームページから！
（スマートフォンもしくはパソコンのメールアドレスをご登録ください。）
◎JA山武郡市の組合員なら、どなたでも登録できます!!

玉ネギ

大網経済センター
営農指導員　山老 秀昭

令和元年産の振り返り

本年は2月下旬～3月中旬まで続いた雨の影響により、べと病の発生が見受けられました。その後は天候が回復し安定したことで、玉の肥大化が進み、全体的に大玉傾向でした。等級は2Lが半分以上で、全体の集荷量は前年を6割程度上回る結果となりました。

病害虫対策（表❷）

●べと病（写真❶）

湿度が90％以上、気温が10～20℃（最適温度は15℃）の条件を好みます。条件がそろうと数時間で発病し、感染が非常に速いという特徴があります。症状は、光沢がなくなり黄緑色に変色し、葉が折れやすくなり、最後には枯死します。初めは圃場の一部に発生し、徐々に圃場全体に広がります。多発してからの防除では効果があまり期待できませんので、発病前から予防散布に努めてください。

写真❶　玉ネギのべと病

●腐敗病

枯れた葉や傷口などから細菌が侵入して感染します。春先に温度が上昇してくると、葉枯れや鱗茎の腐敗などの症状が発生します。症状は軟腐病と似ていますが、比較的、低温期から発生することや、軟腐病ほど悪臭を伴わないことなどで区別できます。発生した株は感染源になるので放置せず、早めに圃場の外で処分してください。防除は温度が上昇する2月下旬から行いましょう。薬剤を株元にしっかりかかるように散布すると効果的です。

●ネギアザミウマ

雨が少なく、乾燥傾向の場合に多発するおそれがあるため、注意してください。成虫は体長1ミリ程度の褐色で細長く、幼虫は体長1ミリ以下で黄色く細長い虫です。成虫、幼虫ともに食害を行い、食害痕は「かすり状の白班」となります。多発すると葉全体が白化し、生育抑制や枯死を引き起こします。発生状況に応じ、7～10日間隔で防除してください。

●タネバエ

幼虫が鱗茎に侵入し食害するため、根が伸びず葉がしおれ、食害を受けた鱗茎は腐敗します。成虫は腐ったものに寄っていく傾向があるため、発生の多い圃場では牛ふん、鶏ふん等の有機質肥料は多用しないようにしましょう。

表❷　玉ネギの病害虫に登録のある薬剤

適用病害虫	薬剤名	希釈倍率・使用量	使用時期	使用回数	作用特性
べと病	ジマンダイセン水和剤	400～600倍	3日前まで	5回以内	予防
灰色かび病	ダコニール1000	1000倍	7日前まで	6回以内	予防
白色疫病他	プロポーズ顆粒水和剤	1000倍	7日前まで	3回以内	予防・治療
べと病、白色疫病	レーバスフロアブル	2000倍	前日まで	2回以内	予防・治療
腐敗病、軟腐病	バリダシン液剤5	500倍	3日前まで	5回以内	予防・治療
タネバエ、タマネギバエ、ケラ、コオロギ	ダイアジノン粒剤5	3～5kg	播種時または定植時	2回以内	
アザミウマ類、ハスモンヨトウ、ネギハモグリバエ	ディアナSC	2500～5000倍	前日まで	2回以内	
アザミウマ類	ファインセーブフロアブル	1000～2000倍	3日前まで	3回以内	

※玉ネギと葉玉ネギは薬剤登録が異なります。農薬ラベルを確認してから使用してください。

6月の分析経過について

		合計6点
残留農薬分析点数	多成分一斉分析	大玉スイカ……2点 パレイショ……1点 メロン（ちばエコ）…1点 ハグラウリ……1点 シシトウ……1点

※残留農薬分析において、基準値を上回る成分は検出されませんでした。

土壌診断点数 … 合計143点